

もう一つの「悲しい玩具」
——啄木の『ローマ字日記』について——

長戸路 信 行

1.

明治41年4月5日、釧路港を349.2トンの「汚ない船」で出港した啄木は、翌々日函館に上陸、宮崎郁雨の好意によって東京行の話をまとめる。小樽に残しておいた妻と子と老母とを函館につれ帰えり、その世話を宮崎郁雨に頼んで、4月24日の夜9時ひとり三河丸に乗り込んだ。その間の費用一切は郁雨が出した。さらに郁雨は餞別として10円を贈っている。館函の「苜蓿社（ぼくしゅくしゃ）」の同人は啄木に素朴な好意を抱きつづけた人たちだから、それぞれ幾何かの餞別金を贈ったと想像されるが、たいした額ではなかったろう。「も一度東京へ行って、自分の文学的運命を極度まで試験せねばならぬといふ……最後の結論」(M. 41.4.25.)¹⁾をもって上京した啄木の懐中にあった金はこれですべてである。

4月27日夜6時に船は横浜港に錨を投ずる。翌28日、正金銀行に友人を訪ねたのち、午後の汽車で新橋に向う。「車窓の右左、木といふ木、草といふ草、皆浅い緑の新衣をつけて居る。アレアレと声を揚げて雀躍した¹⁾い程、自分の心は此緑の色に驚かされた。予の目は見ゆる限りの緑を吸い、予の魂は却って此緑の色の中に吸ひとられた。やがてシトシトと緑の雨が降り初めた」(M. 41:4.28.)。「緑」と言う字のくりかえしに驚ろかされる²⁾が、ここには弾むような啄木の心のうちが現われている。

新橋駅からは人力車をとばして千駄谷の新詩社に——つまり与謝野鉄幹・晶子夫妻の家に着く。人力車を選んだのは、「電車に乗って二度三度

乗換するといふ事が」不安だったからだ。与謝野夫妻としては、若い文学者たちからようやく見放され始めた「明星」をたてなおすための輸血として、かつて処女詩集『あこがれ』をもってはなばなしく文壇にデビューした啄木の上京を待つ理由があった。新詩社に一週間ほど厄介になったのち、盛岡中学校の先輩である金田一京助の好意で、かれの下宿していた本郷区菊坂町の「赤心館」に一室を借りて移る。

この間、盛岡や函館の友人・知人に、また在京の友人たちに、上京を知らせる手紙をせっせとしたためている。まえの2回の上京の折に知り合った若い文学者たち——生田長江、森田白楊（草平）などと再会したし、新しい交友も始まった。たとえば5月2日に開かれた森鷗外宅の歌会に与謝野氏につれられて出席し、そこで佐々木信綱、伊藤左千夫、平野万里、吉井勇、北原白秋らと同席。「平野君を除いては皆初めての人許り」と日記に記している。啄木の日記の魅力の一つは、明治40年代の若い文学者たちとの交際が克明にそして生々と記されていることである³⁾。与謝野夫妻、平野、吉井、北原、平出修、木下杢太郎（太田正雄）、上田敏、土岐哀果（善磨）などの記述は特に多く、これらの文学者についての第一級資料をなしていると言ってよい。もちろんそれは誰れにも見せない内密な日記のなかのことであり、客観公正な伝記でないことは言うまでもないが、それだけに核心をつく人物評となっている場合が多い⁴⁾。

「明星」の財政は左前で、与謝野自身も啄木に「月に三十円以上の損になります」（M. 41.4.28.）と告白しているくらいだから、啄木の生活の面倒をみるどころではない。啄木が「明星」誌上に載せた詩、短歌等に原稿料さえろくに払えない始末で、わずかに「金星会」の仕事をまわしてお茶を濁している⁵⁾。それでは啄木はどのようにして生活を立ててゆこうとしたのだろうか。5月2日付の宮崎郁雨あての手紙のなかにこう書いている。

逢ふ人は皆小生の上京を心より喜んでくれ候、而して小説に転ずると

もう一つの「悲しい玩具」

いふ事を非常に歓迎してくれ候、晶子女子も小説に転ずると申居候、…
…一身上の処置に関しては未だ決定せず、(一)一生懸命書いて居れば、月に三四十円の収入は必ずあるから、唯先づ書くべしとの説（与謝野氏も八分通り此説に候）(二)創作をやると共に⁶⁾準文学をやる覚悟さへあれば二十円やそこいらの職につくよりよいとの説。

以上二説比較的多数にて、口は方々にある由なれどまだその俤に致居候、然し今度は小生も余程實際的常識を重んずる筈に候故、早晚何かの職につく考へに候、新聞なら安くとも三十か三十五枚くれる由に候、兎も角小生は、何故モット早く来なかったかと残念に思う位に御座候何卒御安心被下度候。

この手紙は今までさんざん金銭上の迷惑をかけ、現に老母と妻子の生活をみてもらっている郁雨宛てのものだから、ことさら楽観的に述べているのかもしれないが、ともかく啄木は小説を書いて今日この日から食べてゆけると信じていたらしい。ちなみに明治39年に啄木が渋民村の小学校の代用教員になったときの月給は8円、明治40年に小樽日報社に入社したときは20円である。周囲の人びとも啄木の楽観論をおだてているように読みとれるが、実際はそうではあるまい。鉄幹は啄木を二六新聞に入社させようと主筆に話にいったというのだから（M. 41.5.4.）。

ともあれ「赤心館」の一室に落ち着いた啄木は猛然と小説を書き始める。小説の構想は次から次へと湧き、筆はすべるように動く。「“病院の窓”を十枚許り書いた。思ふ存分に書ける。少し筆をひかへなくちゃならん位、自由に筆が動く」（M. 41.5.20.）。森鷗外宛ての手紙にあるように、一番多い日には34枚も書いた。書いてゆくうちに自信も湧いて来て「東京及び東京の人が、僕の想像して来た程に進歩して居ない」（M. 41.5.7. 吉野章三宛⁷⁾）と思い、「漱石の虞美人草のゆき方ならアレ位⁸⁾のものを二週間で書けるけれど……」（M. 41.5.11. 宮崎郁雨宛）と、いささか自信過剰の有様。東京に来て、何を見ても何を聞いても面白く快く感じ、都

会の物音を聞いていると力に充ちた若き日の呼吸が刻一刻に戻ってくるような気がする。この時点でかれは大都東京と全く和解している。

5月6日から6月11日までのわずか40日たらずの期間に、『菊池君』（これは未完だがかなりの枚数があり、一応読むにたえる）、『病院の窓』、『天鷲絨』、『母』（日記には脱稿と記されているが現存せず）、『二筋の血』とたてつづけに出来上ってゆく。合計で300枚をこえる。一番初めに脱稿したのは『病院の窓』だったが、出来上るや金田一が読み、その日のうちに中央公論の滝田氏のところへ持って行ってくれた。しかしこの作品も、その後出来た『母』も、数日ならずして「無事に」もどってくる。つぎに啄木は『病院の窓』と『天鷲絨』の原稿を持って鷗外を訪ね、留守宅に置いてくる。そして直ちに鷗外にあて手紙を書くが、大ぶ弱気になっていて、「つくづくと東京がイヤになりました。情なくなりました。」(M. 41. 6. 4. 森林太郎宛)と言い、鎌倉の寺へ行って泊ると1日20銭ぐらいで暮せるそうだから2、3ヶ月逃げようかと思っているなどと泣言をならべている。鷗外はその2つの原稿を春陽堂に渡したと啄木に返辞をくれている。鷗外ほどの人から推薦を受けて拒むこともできなかつたのであろう、春陽堂の雑誌「新小説」の編集長後藤宙外は『病院の窓』を買い取ることにした。啄木はその原稿料の支払いを待ち切れず、「あまりと云へばあまり厚かましき儀には候へど、特別の御憐愍を以て幾何なりと稿料御恵み被下候様御取計を仰ぎたく、伏して奉願上候」(M. 41. 6. 15. 後藤宙外宛)と書いている⁹⁾。収入の途は全くなく、最初の月の下宿料からすでに金田一の厄介になっていたのだから、この哀訴懇願も無理ならぬものがあつたと言えよう。「金星社」の短歌添削料は月に1円か2円あつたろうか。新詩社からはたまに5円くらい来た。あらゆる人から金を借りまくった啄木だが、なんと言っても宮崎郁雨と金田一からの借金が多い——と言うよりも、この2人の援助で啄木一家は生きていたと言うべきだろう。啄木と金田一は9月にはそろって「赤心館」を引き払い本郷区森川町の「蓋平館別

もう一つの「悲しい玩具」

荘」に移るが、それも宿の主婦が啄木の滞納分について手酷いことを金田一に言ったので金田一が憤慨し、藏書一切を売り払って支払いに当て引越したのである。そのような苦境にありながら（電車賃 20 銭まで金田一に借りている）啄木の浪費癖はやまず、少しでも金が手に入れば、いや手に入らなくても、とことん浪費し尽さなければやまない。金を借りた当の金田一のところへ、花や青磁の花瓶を買ってとどけて¹⁰⁾いる。金田一はどんな思いでそれを見ていたのであろうか。啄木自身もそういう自分の性がよく分っていて、「金が少しでもあると、気が落付かなくていけない。今日は三度も四度も外出した。金のある時は何も書けぬ。自分は矢張貧乏な方がよい様だ」(M. 41. 6. 14.) などと書いているが、この癖はますます昂じ、いわば身を焼く業火となる。のちに浅草裏の魔窟に通うようになったときも、家族を養うべき金を浪費しているという自責の念の方が倫理的な反省などよりもよほど激しかったように思われる。

たて続けに小説を完成したのは6月までで、そのあとは未完の草稿ばかりが多くなってくる。明治41年7月から翌42年5月にかけて書かれたもののうち、全集に「小説断片その他」として収録されているもの、および原稿は残されていないが日記に何枚書いた、何ページ書いたと記されているものを合計すると23篇ほどになる。全集には執筆年月不詳というものがかなりあるから、実数はこれを上まわるであろう。その他、日記のなかに構想あるいは表題だけ記されたものは非常に多い。勢い込んで書き始めた小説は売れず、生活の途は立たず、従って家族を呼び寄せると言う約束は果せず、そして何よりも自分の作家としての才能に自信を失った心の焦り、いら立ちが目に見えるようだ。「誰か知らぬまに殺してくれぬであらうか！寝てる間に！」(M. 41. 6. 27.)、「自分はすべて、一切、ありとあらゆるものが、苦痛だ。自分自身が苦痛だ」(M. 41. 7. 23.) というような自虐的なことばが日記に増してくる。そして7月27日には「忘るべからざる、最も真面目に過した一日として、此日の日記を書かう」と言う書

き出して、春日町で勢よく坂を下って来た電車にハッと飛び込もうとした体験を記す。そのときかれは、自分は自分の歌をかいた扇を持っている、死ぬときとこれで身許が知れるだろうと瞬間に考えて思いとどまったと言う。しかしそれほどの窮境にありながら、まだ就職して定収入を得ようと言う気にはならない。新聞に広告された読売社の三面記者5名募集に履歴書と釧路新聞に書いたものと同封して送るが、「心ならずも」出したのであり、「希望俸給額四十円か五十円と書いた。俺にこんな巨額な金をくれる訳はない。それは確か。不本意で応ずるのだから、態とこんな詰らぬ事に不平を洩したのである」(M. 41. 8. 29.) と正直な告白をしている。

このような生活のなかで唯一の成功と言えるものは、新詩社の社友であった東京毎日新聞の記者栗原古城の斡旋で同新聞に11月1日より12月30日まで小説『鳥影』が連載されたことである。このほかにも完成された作品としては『赤痢』と『足跡(その一)』とがあり、明治42年の1月と2月に「スバル」に発表されているが、これは「明星」の後身という形で若手の文学者たちが鷗外の指導のもとに創刊した雑誌で、啄木も発足当時の主要な編集者の一人だったから、そこへの掲載は商業的な意味での成功とは言えない¹¹⁾。『鳥影』の新聞連載が啄木にとってどれほどの重みを持つものであったか推測に難くない。11月1日の朝、女中が新聞を室へ入れていった音がすると、ハッと目をさまし、眠い目をこすりながら挿画入りの連載第1回を見る。そして一葉は切抜いて自分用に貼っておき、一葉は妻節子へ、一葉は節子の実家へと送ることにする。原稿料は1回分1円の契約であった。原稿料の前借りを申し込んだが断われ、第1回目の原稿料30円が支払われたのは11月30日である。「最初原稿料、上京以来初めての収入」とその日の日記に書く。連載の始まった日に金は入らなかったが、その前日の10月31日にかれは新詩社から5円受取っている。「仏語の独習書」を買ったがまだ金は余っていた。その金をふところに、かつて金田一と2人でひやかし歩いて「塔下苑」と名づけた浅草裏の街へ行

き、「生まれて初めて」売女を買う。

『鳥影』は初めから60回の約束だったが、作品そのものはいささか尻切れとんぼで、作者は最終回の末尾に「他日若し幸ひにして機会あらば、……稿を改めて……本編の続編を書かむと欲す」と苦しい附記をしている。この作品の世評（啄木の耳に入ったもの）がどうであったかは明らかでないが、かれの自信を一気に取り戻させるほどの批評を受けなかったことは確かである¹²⁾。小説を書いて生活する、一家を養うということがほとんど不可能であると、ようやくかれは見極めをつけ始めたらしく、翌明治42年1月1日の日記には、「予は一人室に籠って北海の母に長い手紙を認めた。予は其手紙に、今年が予の一生にとって最も大事な年——一生の生活の基礎を作るべき年であるとかいた」とある。あいかわらず小説は書いている、あるいは書こうとしている。「スバル」の編集に熱中している、あるいは編集権をめぐる陰謀に熱中している。しかし2月6日には朝日新聞社に同郷の先輩である編集長佐藤北江（真一）を訪ね、翌日の会見で「一つ運動してみるといふ確言」を得る。同郷のよしみとは言え、話がこのようにとんとん拍子に行ったことは例外的な幸運と言うよりほかはない。啄木はこの後も佐藤北江の大らかな好意のもとで、文字通り死にいたるまで庇護されることになる¹³⁾。2月24日に佐藤北江から文書で条件を知らされ、「早速承諾の旨を返辞出して、北原へかけつけると、大によろこんでくれて黒ビールのお祝、十時頃陶然として帰って来た」。前年の読売新聞社に履歴書を出したときとは天地の違いだ。

校正係、月給25円、ほかに夜勤1夜1円づつ、都合30円。宮崎郁雨あての手紙には、「平日は午後一時半から五時半——第一版の刷上るまで」（M. 42.3.2. 宮崎郁雨宛）とあるが、4月21日の日記には「出勤は十二時、退けは六時」になったと書かれている。休日は別に決っていないが、5人の校正係が申し合わせて1週に1日の平均で休むことになっていた。同じ年の1月に「大学国文研究室助手」になった金田一京助の月給が20

円である。勤務時間の短いことを考えれば、校正係とは言え非常に恵まれた職場だったと言うべきである。「二十五円といふ基本さへあれば、家族が来てもどうかかうか暮せる」と宮崎郁雨にも言っている（M・42・4・16・宮崎郁雨宛）。その後も朝日新聞社が啄木の勤務に対してどんなに寛大であったか。とくに発病以後死にいたるまでの期間、全く勤務していないかれに月給を払い続け、ボーナスまで支給した社の処遇は、当時の社会一般の労働条件を考え合わせると驚嘆に価する¹⁴⁾。ところがそれに応えるべき啄木の勤務状態は無残なものだった。日記の記述から明らかにズル休みと判定されるものが3月中に2日、4月中に7日、これらすべてみずからズル休みなることを明記している。5月は一日に出勤したばかりで（それも月給の前借りのためだ）あとはすべて欠勤。6月は記述が不完全ではっきりとは分らないが、多分1日から16日まで休み続けている。この荒れ果てた生活の明治42年4月7日から宮崎郁雨につれられた妻子と老母とを上野ステーションのプラットホームに迎える6月16日までの2ヶ月あまりの期間が『ローマ字日記』の世界である。

2.

啄木は手紙をよく書き、また日記をよく書いた。早熟な才能だったとは言え、わずか26年の生涯である。作品の数は（未完の早稿をふくめても）多くはない。それだけ書簡集と日記の占める比重は重い。しかもそれが通り一遍の時候の挨拶でもなく、単なるメモでもない、その時々生き方、考え方を実に赤裸々に、そして巧みな描写力で表現している。啄木の書簡がこれほど沢山遺されていると言うのは驚きだが、その理由の一つはかれの書簡の持つ魅力そのものにあっただけであろう。有名になったのちの漱石や鷗外の書簡を保存しようと思わないのは例外だろうが、『あこがれ』で名を売ったとは言えその後あまりぱあっとせず天折してしまったこの作

もう一つの「悲しい玩具」

家の手紙がこれほど現存していると言うのは、それをもらった人たちにどうしても捨て切れない気持を抱かせたからに違いない。¹⁵⁾

かれの日記を捨てさせなかったもの、そっくりわれわれに伝えさせたもの、それは書簡の場合と同じであったと言ってよいであろう。「昨夜、ふとした気紛れから古い日記を出して読みましたが、思出される事ばかり多くて暁近くまで眠れませんでした」(M. 41.5.29. 大島経男宛)。「古い日誌を取出して、枕の上で読む。五行か十行読むと、もう悲しさが胸一杯に迫って来て、日誌を投げ出しては目を瞑った。……読んで泣き、泣いては読み……」(M. 41.7.20.)。これらの文字から啄木自身の日記に対する愛着が読みとれる。啄木の日記帳がたどった数奇な運命については「啄木全集」(筑摩書房)に付された岩城之徳の解題にくわしい。かれは死ぬ前に妻節子に日記の焼却を命じたらしい。しかし節子は「啄木が焼けと申したんですけれど、私の愛着が結局さうさせませんでした」と言って、これを(宮崎郁雨を通して)函館図書館長岡田健蔵に託し、夫の死後1年であとを追うように逝ってしまう。原稿、ノートなどと一緒に日記を寄託された岡田館長が必死にこれを守り抜きたいきさつは、それだけで一つの感動的な物語となっているが、かれをそのような勇気ある行動に馳りたてたのも日記の持つ魅力そのものだったに違いない。「石川啄木日記」全3巻(世界評論社)の第1回配本が世に出たのは昭和23年10月、啄木の死後36年半のことである。

日記は13冊から成っている。もっとも古い『秋舂笛語』の書き始めの日付が明治35年10月30日、啄木の第1回上京の記録であり、最後の『千九百十二年日記』は明治45年2月20日までで、これは死の前々月にあたる。かれが日記をよく書いたと今述べたが、それは日記を規則正しく記したと言う意味ではない、1月1日に意気込んで書き出したが、2月にはメモ程度にしぼんでしまったものもある。しかし灰燼に帰した函館を逃れて、新聞記者として北海道を渡り歩き、上京して小説を書き、成功せ

ず、ついに家族を迎えるまでの、いわば啄木の生涯のうちでもっとも興味ある時期の日記は質量ともに充実している。読んでもっとも面白いのがこの間である。

『明治四十一年日誌』はノート4冊から成り、量的にももっとも多い。第1ページに器用な自筆のカットを入れている。それ以前の日記にもカット入りのものがあるが、これはかれの稚気、と言うよりもむしろ日記に対する意気込みを示すものであろう¹⁶⁾。翌明治42年の日記は博文館発行の『明治四十二年当用日記』を用いている。1日1ページに割当てられ、縦罫入り。啄木はこまかい字で1行の罫のなかに2行書いているから、1日分がかなりの行数になるが、それでも長さは制限される。この縦書きの『当用日記』を4月6日まで書いて突然止め、翌4月7日から洋横罫のノートにローマ字をもって書きはじめる。これが『ローマ字日記(NIKKI I. MEIDI 42 NEN 1909)』である。現在この日記を明治文学の傑作の一つに数えることに異を称える人は少いであろうが、そのような評価に先鞭をつけた一人は桑原武夫である。かれははやく昭和29年、岩波版「啄木全集」の別巻にこう書いている。

「ローマ字日記」は啄木の全要素をふくむものであり、日本の日記文学中の最高峯の一つといえるが、実はそれではいい足りない。いままで不当に無視されてきたが、この作品は日本近代文学の誇りとして、最高傑作の一つに数えこまねばならない。

啄木はなぜローマ字で書きはじめたのであろうか、それが第一の問題である。これについては『ローマ字日記』の第1日、すなわち4月7日の項に

そんならなぜこの日記をローマ字で書くことにしたか?なぜだ?予は妻を愛してる。愛してるからこそ日記を読ませたくないのだ、——しかしこれはうそだ!愛してるのも事実、読ませたくないのも事実だが、この二つは必ずしも関係していない。

とあるのがよく引用される。これをどう判断したらよいのか、人によって意見はまちまちであろう。しかしとにかく本人が記していることだから、理由の一つとしてよいであろう。しかし実際はその4日前から、つまり『当用日記』の最終部分からローマ字書きは始まっている。かれのローマ字に対する関心が浅いものでなかったことは桑原武夫の指摘しているように4月19日の日記に、「帰ってきて『坂牛君の手紙』をローマ字で書き出したが……」という記述がみえ、また手紙に「実行運動——普通選挙，婦人開放，ローマ字，労働組合——も初めたいものと思っています」(M. 44. 2. 6. 大島経男宛)と書いていることから察することができる。かれが日本語の改良をつねづね考えていたことは注目する必要がある。しかしなぜ『当用日記』の4月3日からローマ字で書き出したのかは分からない。その日の記事は短い、「電車賃がないので社を休む」という一行が目につく。

ではなぜ『当用日記』を4月6日で打切って、余白を残したまま新しいノートにいわゆる『ローマ字日記』を書き始めたのか。4月8日(つまり『ローマ字日記』の第2日目)の記事に次のような一節がある。

着物の裂けたのを縫おうと思って、夜八時頃、針と糸を買いに一人出かけた。本郷の通りは春の賑わいを見せていた。いつもの夜店のほかに、植木屋が沢山出ていた。人はいずれも楽しそうに肩と肩とをすって歩いていた。予は針と糸を買わずに、「やめろ、やめろ」という心の叫びを聞きながら、とうとうさいふをだしてこの帳面と足袋とサルマタと巻紙と、それから三色菫の鉢を二つと、五銭ずつで買ってきた。予はなぜ必要なものを買う時にまで「やめろ」という心の声を聞かねばならぬか? 「一文なしになるぞ。」と、その声が言う。「函館では困ってるぞ。」と、その声が言う!

啄木は4月6日に社から4月分給料のうち18円だけ前借りしていた。足袋とサルマタと巻紙(毛筆の手紙が多い)とは買って後悔する品とは言

えまい。かれは花がなければいられなかったらしく、金田一から借りた金で生活していた時ですら頻繁に花を買っていること（「紫陽花と白い鉄砲百合を三十銭」M. 41.6.23.）はすでに書いた。それにくらべれば1鉢5銭の堇の鉢はあまり高くはない。「やめろ、やめろ」という心の叫び¹⁷⁾の原因は、主として「この帳面 (Kono Tyōmen)」にあったのではないだろうか。このノートは縦20.5センチ、横15.9センチ、背革黒クロス装、横罫で紙数は231枚という立派な¹⁸⁾もの。啄木はこのハイカラなノートの魅力に抗し切れなかった。そしてこのノートを買ったが故に、このノートに引きずられて、いままでの『当用日記』とは別の独立した日記を書くこと、ローマ字で書き通すことを決心した。さらに、今までの日記とは違ってこれを一つの文学作品に仕立てる意図をかなりはっきり抱いて書き始めたと思われる。「この帳面」を買ったのが4月8日で、『ローマ字日記』はその前日にさかのぼって書き出されている。啄木が忙しい日にはメモだけを記して置き、あとになって日記に仕立てる場合がかなりあったらしいと言うことは、『明治四十一年日誌』の12月分の「紙片メモ」を見ても分る。かなり長文の日記をその日その日にきちんと記すことは事実上不可能であったろう。このことは啄木に自分の日記を単なるメモに終らせまいとする気持ちが以前からあったことを証している。『ローマ字日記』ではその気持ちをさらにはっきりとさせたのであろう。

たとえば「貸本屋が来たので」本を借りたという記述が『ローマ字日記』以前に15回ほどもあるが、すべて何という本を借りたとただそれだけの記述なのに、4月7日の書き出しには「いつも来る貸本屋のおやじ」との話のやりとりが季節の描写を織り込んで書かれている。その「おやじ」の言葉というのが、啄木が上京当時ひどくコンプレックスを抱き、なんとか習得したいと思った「純粹の江戸言葉」¹⁹⁾である。このあたりは日記と言うよりは小説の書き出しのように思える。『ローマ字日記』の第1日目は4百字詰原稿用紙にすると約7枚、第2日目は約11枚、第3日目は

もう一つの「悲しい玩具」

3枚半、第4日目は実に約17枚、第5日目は7枚半になるという²⁰⁾。社に勤めながら、友達づきあいをしてしながらこれだけの日記を書いているのは、ほかのものを書く時間はなかったであろう。小説を書くためにと無理に自分を納得させ、また金田一に言い訳をして社をサボる。そして書き始めるが、出来上るのは断片ばかり。「今日も休む。今日は一日ペンを握っていた。『鎖門一日』を書いてやめ、『追想』を書いてやめ、『面白い男?』を書いてやめ、『少年時の追想』を書いてやめた」(M. 42.5.4.)。しかもそういう自分を「今日こそ必ず書こうと思って社を休んだ——否、休みたかったから書くことにしたのだ」(M. 42.5.17.)と冷厳に見すえる目をかれは失っていない。これが啄木の痛ましきだ。結果としてかれの日記が小説を吸収して成長したことになる。

桑原武夫はまた『ローマ字日記』の文体についても早くから注目し、ローマ字がかれを倫理的、文学的、社会的抑圧から解放し、それによってかれに一つの自由世界を構築することを許し、その世界での行動すなわち表現を驚くべく自由なものとした、と言っている。そしてその例として4月9日の一節を挙げている。

智恵子さん！なんといい名前だろう！あのしとやかな、そして軽やかな、いかにも若い女らしい歩きぶり！さわやかな声！二人の話をしたのはたった二度だ。一度は大竹校長の家で、予が解職願いを持って行った時、一度は谷地頭（やちがしら）の、あのエビ色の窓かけのかかった窓のある部屋で——そうだ、予が『あこがれ』を持って行った時だ。どちらも函館のことだ。

ああ！別れてからもう二十ヶ月になる！

それに続けて、「このように甘美で、しかも率直な文体が、今はしらず、当時ありえただろうか。ローマ字でなければ、啄木にも、こうした流露はありえなかったと考えられる²¹⁾」と言っている。それではなぜローマ字の使用が新しい文体を生んだのであろうか。

それは一言で言えば視覚的言語から聴覚的言語への（半ば無意識の）移行が生んだものと言えよう。ジュール・ジリエロン (J.Gillieron) の言語地理学によって明らかにされた「同音衝突」の現象は、別々の意味を表わす2つの異形の語が、音声変化のために同じ音形をとるようになると、混乱を避けるためにどちらか一方の語が追い出されて用いられなくなると言う言語変化の仕組みである。ヨーロッパの言語ではこれが重要な現象として詳しく研究されている。日本語でも同じ現象のあることを、東北地方の母を意味するアバ・アッパについて立証した学者もあるが、そんな特殊な例を引くまでもなく日本語は同音異義語であふれている。私立と市立、科学と化学、想像と創造など、数えあげれば切りがない。「貴社の記者は汽車で帰社する」という文も作れるのだから。このような同音異義語はたしかに紛らわしく不便だが、われわれがそれを何とかしのいで使用していられるのは、音声を使って話している時でも、使われている漢字を頭の中で視覚的映像として追っているからである²²⁾。つまり音声と文字の間に漢字が在るわけである。ローマ字を使用する時この漢字の支えが取り払われて、書く人は日本語の音声に直接接触れることになる。自分でローマ字を試してみればすぐ分ることだが、われわれはローマ字で記述しながら（カナ文字の場合もほぼ同じと言ってよいが）意識せずに口を動かしている。外面的に動かさなくても、口の中では動かしている。発声に結びつけないとローマ字の綴りが出て来ないものらしい。そして発声してみて同音語の不合理性にあらためて驚く。「コーコー」と口の中で発音して、その漢字表現が20以上もあることに気付くわけだ。ヨーロッパの作家の場合、自作の小説を朗読してみて文章を推敲すると言うのは決してめずらしい話ではないが、日本の作家では——啄木の同時代には——稀れなことではなかったか。啄木はその稀れな実験をしたことになる。音読して聴き手（この場合は書いている人自身の耳だが）に理解できる文章を作ろうと努力せずにはいられなくなる。こうしてローマ字表記という、在来の日本文学の言語で

もなければ外国語でもない、歴史の抑圧から逃れた一つの新しい言語が日本語に強制した洗淨，それが『ローマ字日記』の新鮮な文体を生み出す原動力となった。²³⁾

ローマ字で書くのは愛している妻に読ませたくないからだ，という啄木自身の言葉をさきに一応肯定しておいた。しかし節子は英語を習ったこともあり，小学校の代用教員もしたくらいだから，ローマ字を全然読めないとは考えられない。²⁴⁾ 啄木の日記にはローマ字の部分以外にも妻に見られて具合のわるい個所はいくらかもある。妻子を呼び寄せれば，日記を隠し通すことは，もし節子にその気があれば不可能に近い。あとは節子に向けて「これに手を触れてはならん」と厳命するほかはない。残念ながら啄木にはそれができたと私は思う。新しい思想の青年旗手だった啄木だが，家庭内での妻子に対する言動は当時の並の日本人と変らなかった。しかしともかくローマ字が他人の目を防ぐ手段の一つにはなったであろう。だがローマ字は他人の目をさえぎるためだけではなかった。それは書く人自身に仮面——『ローマ字日記』にも Kamen の語が出てくる——をかぶせる。仮面をかぶった人間は大胆になる。明治41年11月1日に『鳥影』の新聞連載が始まり，その日啄木が「塔下苑」に遊んだことは書いたが，その日の日記に「O-Mitsu-san!」というローマ字が出てくる。これは売女の名前だろう。啄木の日記には英語の引用はままあるが，ローマ字の使用はこれが最初である。このあと11月7日と，翌明治42年1月19日にもローマ字書きの女の名前が記されている。そのほかのローマ字書きは全くない。一人暮らしで誰れにも見られるはずのない日記にすら，かれは買った女の名前を記すのにためらいを感じないではいられなかった。同じ心理作用が，社会的制約のもとに押しひしがれた日常を超克する手段として，自分だけの言葉による自分だけの世界を構築せしめたのだ。米田利昭が，「密室で，ローマ字表をにらみながらゆっくり，ゆっくり書いていく時，人々から忘れられ，どこからも原稿依頼のないあわれな作家に，秘密の喜びが湧き上

ったろう。いわば彼は、自分にあてた《深夜叢書》を書き続けていたのである²⁵⁾」と書いているのは、この間の啄木の心理をよく推量していると言うべきであろう。

背革黒クロス装の立派なノートを前にして、それでは啄木を何を書きつけたのだろうか。4月10日の記事は特に印象が強烈で、さきに述べた桑原武夫の「日本近代文学の……最高傑作の一つ」という讃辞はこの1日の記事だけでも肯かれるほどである。そのなかの「塔下苑」での描写は、はじめの頃の版では削除されいたものだと言う。その他、短歌の会を罵倒するあたりにも、金田一の部屋で「数限りの馬鹿真似」をするあたりにも凄味があって、啄木がギリギリのところで生きていたことが感じられる。そのギリギリの調子にこの日記の魅力があるのだが、いったい啄木をそれほど追い込んだものは何かと言うと、これが意外に概括しにくい。具体的な状況としては、日一日と迫ってくる家族の上京と言うことがある。「現在の夫婦制度——すべての社会制度は間違いだらけだ」(M. 42.4.15.)と言う記述もあるが、かれが「半独身者」の自由を結構たのしんだことを思えば、批判の言葉も力を失う。嫁と姑との衝突もあって、やがて節子の家出という事態にまで到るのだから、深刻でないとは言えないが、当時の社会としてはありふれた家庭劇だったとも言えよう。日記や手紙から察するところ、老母も妻も普通以上に辛抱強い女性だった²⁶⁾。啄木が釧路の新聞社に行ったあと、小樽に残された老母と妻と幼い京子の生活は悲惨の一言に尽きる。それに耐えた彼女たちは実に健気だったと私は思う。啄木も、自分の母と妻を誉めあげ、感謝を表わす言葉をたびたび日記に記している。啄木が夫婦制度をふくめて日本社会全体に「時代閉塞の現状」を明確に意識したのは明治43年6月の幸徳秋水らの「大逆事件」後である。その時始めて啄木は自分自身の中に渦巻き、紛糾している悩みを収束する焦点を見出すことになる。

『ローマ字日記』の時期に書かれた『一握の砂』(M. 42.5.7. 起稿)

もう一つの「悲しい玩具」

と言う題名の評論がある。原稿用紙にして14枚ほどの未完の作品だが、自分の性格と生活をよく分析している点で見逃がせない。そのなかでかれは、自分はどんな為事を始めても初めは無暗に乗気になって一生懸命やるが、それが必ず破綻の種を内蔵していて、いわばその種を育てて一刻も早く破綻を収穫しようとしているようなものだ。人との交際もそうで、誰れとでも二度目に会った時には昔馴染みの気分になるほど人好きのする質だが、分ってしまうと倦きてくる、「人に愛される男、そして、黙って愛されてはゐない男！」だ。そして自分のうしろにはいつも嘲笑の鬨の聲が挙がる。「上ろう、上ろうと思って焦心ってゐると何時か知ら落ちて来る……(前肢の長すぎる)不幸な兎だ。」安心のみを求めてついに安心を得られない男。今は何とかして作家になりたいものだと思っているが、才だけでほんとうの作物はできるものだろうか。時代の潮流はずんずんと流れてゆく……要約してみるとこのような内容だが、『ローマ字日記』を強いて要約したら、これと同じことになる。

『ローマ字日記』は5月に入ると何日間も続けて日付が抜けて、4月の4分の1の分量しかない。6月はついたちの日の記事だけで、「……やがて花が来た。寝た。なぜかこの女と寝ると楽しい。十時頃帰った。雑誌を五、六冊買って来た。残るところ四十銭」で終わっている。もはや日記を続ける意志を失っていることが文面から感じられる。そしてこのあとに「二十日間(床屋の二階に移るの記)」というのが付いていて、6月16日に上野駅に老母と妻子を出迎えるところで終わっている。つぎの明治43年の日記は、縦罫ノートに4月1日より26日までの記録があるばかり。明治44年の日記も分量は多くはないが、「大逆事件」の死刑判決前後の記録は啄木の社会主義思想を知るに貴重な資料である。腹膜炎で入院してからの日記、特に明治45年の1月1日から詳しく記しはじめた『千九百十二年日記』は、啄木一家を襲った結核との凄絶な戦いの記録に、息をのませるばかりの迫力がある。『ローマ字日記』4月10日の記の中にある詩、

一年ばかりの間、いや、一月でも、／一週間でも、三日でもいい、／神よ、もしあるなら、ああ、神よ、／私の願いはこれだけだ、どうか、／身体をどこか少しこわしてくれ、痛くても／かまわない、どうか病氣さしてくれ！／ああ！どうか……

の願いは、祈った以上にかなえられた。かれの日記の魅力には運命までが荷担していたのだ。

3 .

明治の人はよく日記を書いたと言う。それがどのような人のどのような日記であれ——時代が遠ざかれば遠ざかるほど——個人史としても社会史としても、考古学的価値は持つであろう。しかしそれが文学的価値を持つかどうかは別の問題だ。啄木は規則正しく日記を書いたわけではないが、全体としては分量も多く、1日の記述に長文のものが多い。かれの書簡の場合も同様で、原稿用紙にして20枚かそれ以上のものもある。そしてそれらすべてが読んで実に面白い。と言うことはそれが「文学」になっているからだ。啄木は文学作品を創るつもりで一々の日記や手紙を認めたのではないだろうが、出来上ったものは「文学になってしまった」。これが真の文学者の宿命と言うものである。

そのなかでも2ヶ月余の『ローマ字日記』はかれがことさら文学を意識して書いたものとして特別の位地を占める。そしてその同じ時期、啄木は小説を書こうとして最も焦り、最も絶望していたのである。その焦り、その絶望、そしてそこから来る生活の荒廃、それらをあらゆる憤懣をこめてぶちまけたのが『ローマ字日記』となって結晶した。かれが「家」の問題を取り挙げて書いていれば——「家」を書く資格は充分あった——文壇的にはもっと成功していただろうと言う想像は充分成り立つ。しかしかれにはそれができなかった。当時の文壇の自然主義に対してかれが違和感を抱

もう一つの「悲しい玩具」

いていたことは『きれぎれに浮んだ感じと回想』（M. 42.12.1.「スバル」）などに理論的に述べられている。しかし真の理由はもっと生理的なものだったろう。文壇的に失敗したこと、それが「かれの立派なところ」で、「かれが小説の上手な二流作家に終らなかったゆえん」であると猪野謙二は言っている²⁷⁾。小説の書けない啄木は自分の小説の失敗を『ローマ字日記』に書いた。流産した小説は日記となり、日記はかれの「小説の小説」となった。

詩歌雑誌に発表した『一利己主義者と友人との対話』（M. 43.11.1.「創作」）はかれの短歌観を述べたものだが、「一生に二度とは帰って来ないのちの一秒だ。おれはその一秒がいとしい。ただ逃がしてやりたくない。それを現わすには、形が小さくて、手間暇のいらぬ歌が一番便利なのだ」と言う個所はよく引用される。そのすぐあとに短歌に対する否定的な考えもちょっと顔を出す²⁸⁾が、明治44年1月9日付の瀬川深苑の書簡は、公表するものではないだけにさらに暗い否定的見解が自虐的に綴られている。

僕の今作る歌は極めて存在の理由の少いものである。僕はその事をよく知っている、言はば作っても作らなくても同じ事なのだ、……僕の今の歌は殆ど全く日記を書く心地で作るのだ……日記は上手下手によって価値の違ふものではない……ただ僕には、平生意に満たない生活をしてゐるだけに、自己の存在の確認といふ事を刹那刹那に歌はれた「自己」を意識することに求めなければならないやうな場合がある、その時に歌を作る、刹那々々の自己を文字にして、それを読んでみて僅かに慰められる、随って僕にとっては、歌を作る日は不幸な日だ、刹那刹那の偽らざる自己を見つけて満足する外に満足のない、全く有耶無耶に暮した日²⁹⁾だ。

そして「歌なんか作らなくてもよいやうな人になりたい」とまで言う。京都で医学の勉強をしていた瀬川深が、前年12月に出版された『一握の

砂』の読後感を書き寄せたのに啄木が感謝をこめて返辞を書いたものである。「朝日歌壇」の選者にもなり、歌人としての名声がようやく高まり始めたときに、歌人としての自分をこんなふうに断罪している。もっともこの手紙には、世間なみの歌詠みの列に入れられてはたまらんという自負も見えていて複雑な内容になっている。嫌悪と侮蔑を感じながらもなお歌への自負と愛着を捨て切れない啄木のこの気持ちをよく現わしたのが「東京朝日新聞」に載った評論『歌のいろいろ³⁰⁾』の末尾の「歌は私の悲しい玩具である」と言う言葉だ。「僕の今の歌は殆ど全く日記を書く心持で作るのだ」とかれは言う。これを逆にすれば歌を作る心持で日記を書くということになる。歌と同じように、かれは一生に2度と帰って来ないいのちの1秒をいとしいと思うが故に日記を書いた。書いた啄木にとってはそれが究極の理由であった。書かれた歌と日記は、しかし文学となって独り立ちし、単なる一個人のいのちの1秒を記念するだけのものではなくなってしまったが、啄木にとってはそれが究極の理由であってよかった。もしさらにいのち長らえたとしたら、おそらく文学を放棄するに到ったであろうと推測される³¹⁾啄木にとって、所詮、文学は墓標にすぎず、そうであるならば、刻々に生れては過ぎてゆく日記は、短歌とともに、墓標に供えるにまさにふさわしい玩具なのだから。「日記は私のもう一つの悲しい玩具である」と、かれは言ってもよかったのだ。

注

引用は「啄木全集」全8巻（筑摩書房，1967年）に依った。岩城之徳氏が全巻にわたって解題を書いている。

参考文献は省略した。

- 1) 明治41年4月25日付の日記を示す。以下同じ。
- 2) 啄木はまだ冬景色の北海道から出てきたのだから、沿線の早い春の訪れに驚いたのだろうが、それにしても岩手の農村に育ち、北海道の春秋をも経験しているかれがこれほど緑の印象を記しているのには奇異の感にうたれる。同じころ書かれた書簡にも「緑」の字がしきりに出てくる。

もう一つの「悲しい玩具」

「緑の都の第三信は……」(M. 41.5.11. 郁雨宛書簡)、「二十七日夕……雨の中に緑の都の人と相成申候」(M. 41.5.12. 新渡戸仙岳宛書簡)など。現在のわれわれには想像もできないが、明治の末頃の東京はまだほんとうに「緑の都」だったらしい。川添登『東京の原風景』NHKブックスなどを参照されたい。

- 3) 交際好きと言うのは啄木の性格の特徴の一つである。中学校時代、北海道時代、そして東京時代と、実に多くの友人に恵まれている。むしろ恵まれすぎて、よくこれで読書したり創作したりする時間があったものだと思う。と言っても、かれが孤独でなかったと言うわけではない。
- 4) 同じ時期に木下杢太郎もほんのメモ程度の日記を遺しているが、啄木のものと照合してみると日時等は(『杢太郎日記』に記述のあるかぎり)よく一致している。啄木は杢太郎に非常な好意を抱き、その才能を評価し、詳しく記録を遺しているが、杢太郎は啄木についても、その他の「パンの会」の友人たちについても、この時期メモ以上のものは遺していない。
- 5) 「新詩社附属の、歌の添削をやる金星会」の仕事を鉄幹はまわしてくれた。20首につき30銭をそえて申し込むのだが、月に数円の仕事にすぎない。
- 6) 原文では字の脇に丸印がついている。
- 7) 明治41年5月7日吉野章三宛書簡を指す。以下同じ。
- 8) 啄木は鷗外の家歌会にはしばしば出席し、鷗外とも個人的に話し合う機会があったが、漱石とは交渉がなかった。しかし啄木の病状が悪化し、薬を買う金もなくなったときに、森田草平が「夏目さんの奥さん」からもらってきたと10円を見舞に持ってくる。
- 9) この原稿料は啄木が再三にわたって懇請したため、翌年の2月に1枚25銭の割で支払われた。春陽堂としては処置に困ったあげくのことだろう。ついに活字にはならなかった。22円75銭の稿料を手にした啄木は、白秋をさそって浅草に遊び、2人で16円の散財をする。
- 10) 啄木はよく花を買って来た。あれほどの貧窮のなかではこれも浪費の一つには違いない。しかしこれについては別の評価ももちろんあろう。
- 11) 啄木は1年あまりで「スバル」との縁を切ってしまうが、この雑誌が明治末年かから大正初頭にかけて日本の文壇に大きな足跡を残したことは知られている。
- 12) この翌年3月の「小説月評」に出た中村星湖の『足跡』評がこっぴどいものだったために、啄木は(その一)を書いただけで中断してしまったのだと言われている。
- 13) 啄木は長男に佐藤北江の本名をもらって真一と名付けた。ただしこの

長男は4週間しか生きなかったが。

- 1 4) 瀕死の啄木にたびたび社内募金を行って見舞を贈った社員一同の善意もまた然り。
- 1 5) 手紙の主な宛先が岩手、北海道などの地方だったことも幸した。東京から地方へ向けて送られたのだ。これが逆だったら、失われる率はもっと多かつたらう。
- 1 6) 死の前年に詩集『呼子と口笛』をノートに清書し、目次を付け挿絵を画きそえたが、これは出版への見果てぬ夢と言うべきものだった。
- 1 7) この心の叫びは絶えず啄木を追い続ける。「『行くな！行くな！』と思いながら足は千束町へ向った」(M. 42.5.1.)。
- 1 8) 「啄木全集」第6巻の岩城之徳の解説による。
- 1 9) 「……てい子さんが訪ねて来た。……爽やかな語は、純粹の江戸言葉なので、滑かに、軽く、縷々として糸と続く。予は此弁を知りたいと思ふので、幾度か腹の中で真似をして見るが、怎うしても恁う軽く出来ぬ」(M. 41.5.14.)。
- 2 0) 「啄木全集」第8巻の『ローマ字日記』について」(相馬庸郎)による。
- 2 1) 啄木の文体は『ローマ字日記』の直前には非常に自由な口語体になっていた。3月12日の一節を引いてみよう。「わびしいわびしい雨の音、雨滴の音……それを聞いてゐると、目を瞑ってきいてゐると、渋民の寺にゐた頃の、静かな、わびしい、そして心安かった夜の雨がしみじみと思出された。窓をあけて見ると、雨の中に無数の燈がみえる。……あゝ、自分は東京に来てゐるのだ、……大きい都会、その中に住んでゐる人は皆生命がけに働いてゐる。……その中に自分もまぎれこんでゐる。……あゝ、自分は働けるだらうか、働き通せるだらうか！」だからローマ字になって突如として文体が新鮮になったのではないことを認識しておく必要がある。
- 2 2) 鈴木孝夫『閉された言語・日本語の世界』新潮選書、P. 68 以下を参照。
- 2 3) 正岡子規の『病牀六尺』の場合も、病気のためにやむをえず口述筆記させたことが、「今日読んでみて全くと言っていいほど違和感を感じさせない文体」を生んだと言う。(大岡信『表現における近代』岩波、P. 118)
- 2 4) 「啄木全集」第6巻、小田切秀雄の解説。
- 2 5) 米田利昭『石川啄木』勁草書房、P. 48。
- 2 6) 彼女たちに比して父一禎は性格的に強弱の振幅の大きい人だったらしく、無責任な行動が目につく。宗費滞納事件、2度の家出。この性格が

もう一つの「悲しい玩具」

多分に啄木の中に流れ込んでいる。なお母親の性格については厳しい見方をする人もある。結局一番堪え忍んだのは節子であったかもしれない。

- 27) 猪野謙二『明治の作家』岩波, P. 236。
- 28) 盛岡中学校で啄木の一級下。同人誌を出した仲間だった。
- 29) アンダーラインは原文では傍点となっている。
- 30) 明治43年12月に4回にわたって連載された。
- 31) 大胆な推測だが、十分な根拠があると私は思う。